

我が家には息子と娘の2人の子どもがおり、当然ながら私はその母親であるわけだが、実のところ母親としての私は、どう考えても合格点もらえるとは思えないダメ母である。たとえば、私が朝が苦手なことは学生にも良く知られているのだが、旦那が齢のせいにかめつき早起きになったのを良いことに、朝食を準備することから、娘を起して学校に送り出すことまで、ほとんど父親に任せっきりである。強いて言えば、ソファーに寝転がって携帯で天気予報をながめ「傘を持って行ったら」と勧めたり、いつも朝はひどく不機嫌な娘が、たまにご機嫌良く「いってきませう」と言った場合に、遠くから「いってらっしゃーい」と叫んだりといったくらいのこととする。

このような私が、講義では「親としての成長」などを偉そうに話しているのだから、申し訳ない気持ちになるのだけれど、実はそんな私でも、密かに、子どもと一緒に生活によって少しは変化できているのではないかと思うことがある。それは、今まで全く体験してこなかった新しい世界を、子どもがもたらしてくれるということだ。

たとえば、私は息子の持っていたおもちゃがきっかけで、自動車レースのF-1の世界を知った。息子が保育所に通っていた頃、車が好きでたくさんミニカーを所有していたのだが、とても凝るタイプなので、ひとつひとつについて説明を求めた。その中に偶然F-1の車があり、私は「スポーツカー??」などとしか言うことが出来なかった。そんな半端な説明に息子が満足するはずもなく、私もまあ凝るタイプなので、いろいろと調べ始めた。数誌の雑誌を必ず買い、夜中にはレースを観戦し、情報収集に努めるうちに、自分がはまってしまったというわけである。そうこうしているうちにお気に入りのドライバーもでき、たしか彼のファンクラブが作ったあり得ないくらいダイサい応援歌が私の幻想を一気に打ち砕くまで、熱心なファンであったのである。私は研究室のはしっこに小さなポスターを貼ったり、彼の乗る車がプリントされた事務職員の方所有のマウスパットをあからさまに物欲しげにながめたりした。そして、夜中にテレビを観ながら応援し、「よっしゃー」とか、「きゃー、やめてー」（抜かされそうになっている時）などと叫び、もうその頃にはすっかり車を卒業していた息子に、「お母さん、またF-1見てるの? うるさくて寝てられない

よ」と苦情を言われる始末であった。

また、その他にも息子のおかげでRPG（ロールプレイングゲーム）を知ることになり、これも結構楽しむことができた。きっかけはポケモンだったけれど、だんだん本格的なものをするようになり、さっさも書いたが凝る方なので、攻略本を買って集め、付箋をはり、マーカーを引いて熱心に取組んだものである。と、ここまで書いて気づいたのだが、私は親としての成長について書くつもりだったのに、これでは人間的墜落の記録になってしまっているのではないか。夜中に騒いで息子の安眠を妨害したり、攻略本片手にアイテム集めなどを行ったりしているから、朝起きられないのだ。そんなことしていないで、さっさと寝て、朝ご飯を作れ! というお叱りの声が聞こえそうである。

息子ではダメなようなので、気を取り直して、娘の例をあげることにしたい。中学校で吹奏楽部に所属している娘に教えられて、私は「ラッキードラゴン〜第五福竜丸の記憶」という曲と出会った。副題にある第五福竜丸は、ご存じの方も多いと思うが、アメリカがビキニ環礁で行った水爆実験により被爆した船であり、この曲は、その事件を元に描かれた、ベン・シャーンという画家の一連の作品（その「ラッキードラゴンシリーズ」は「ここが家だ〜ベン・シャーンの第五福竜丸」という絵本になっている）に触発されて作曲されたものである。しかし、私は初めてその曲名を聞いた瞬間に、映画の「燃えよドラゴン」を連想し、なんだかアクション映画のタイトルみたいだな名前だなんて思ってしまい、「福竜丸は全然ラッキーなんかじゃないよね。ラッキーなドラゴンってどういうこと?」と言った記憶がある。後でこのタイトルが福竜丸という船名の英語の直訳だと娘に説明されるまで、そのことに全く気づかなかったのである。アホなことこの上ない。さらに、私は、ベン・シャーンという画家も全く知らなかったのだ、旦那に「ベン・シャーンを知らないの?」と言われ、「第五福竜丸を知らなかったくせに...」と反撃し、互いの無教養を馬鹿にしあったのであった。

その後、私は旦那に馬鹿にされて悔しかったこともあって、その「ラッキードラゴンシリーズ」の絵を見たくなり、図書館で「ここが家だ」という絵本やら、分厚い画集やらを借りてきて、初めてその作品に触れたのである。絵本の絵はどれも

非常に印象的だったが、中でも私が強く惹かれたのは、「科学者」という絵である。グラフと数字にまみれて無表情な目で実験の成果を眺める真っ青な服の科学者。シャーンは常に、科学が人類にもたらす害や、そうした科学技術を管理する上で必要となる倫理観について考えていたとのことである。先の福島原発事故により、私たち一人一人が、意識しないうちに日常生活の中に入り込んでいる先進の科学技術の利用に対する疑問を突きつけられていたその絵はかなりの衝撃であった。もちろん、ほとんど全ての研究は人類の幸福を希って行われるものであるし、また誰よりも優秀な頭脳を持っているであろう「科学者」たちが、自分たちの研究がもたらす影響について無自覚であるとは思えないが、今の福島の現状を見れば、学者たちにもその研究成果の恩恵にあずかる私たちにも、大きな自戒が求められていることは明らかである。

さて、子どもから与えられたちょっとはまともな体験をどうかご紹介できたのではないかと思うけれど、朝の寝ぼけ眼はあいも変わらず、である。まあ、客観的に聴けばたいしたことはないであろう娘のプラスバンドの演奏を涙を流さばかりにして聴き（実際に時々泣く）、生活費の送金を盾に無理矢理メールで送らせた息子の課題作品の写真（彼は現在建築専攻の学生である）を、成績を度外視してとても他所様には聞かせられないほど夫婦で賞賛するその時こそ、子育ての幸せと言える瞬間であり、これが子どもが与えてくれる最も大きなものなのであろう。かくして、ダメ母+親バカ全開の日々は続くのである。



左:「ここが家だ」表紙 右:ベン・シャーン「科学者」

学内広報誌「マイトリー」は、8月と3月に発行し、本学学生の保護者に送付しています。

在学生みなさんにおかれましては、学生食堂・パンフレットラック等、学内の所定の場所に設置していますので、ご自由にお持ちください。



札幌大谷大学
札幌大谷大学短期大学部

maitri マイトリー

札幌大谷大学

札幌大谷大学短期大学部 学内広報誌 No.73

編集/広報委員会

清水郁太郎 松井亜樹 倉橋健 今義典 大谷晃弘
村上千晶

発行/2011年8月8日

札幌大谷大学 札幌大谷大学短期大学部

同 教育後援会

〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

Tel.011-742-1651 Fax.011-742-1654

http://www.sapporo-otani.ac.jp